



ONLY LYON 

報道基礎資料

PRESS KIT

2016年10月

歴史と文化

文化遺産の中に息づく 2000年の歴史

ローヌ川とソーヌ川が交差したところに位置するリヨンには、2000年以上にわたって連綿と続いた都市に特有の歴史の記憶が残っています。フルヴィエールの丘にあるガロ＝ロマン時代の遺跡から旧市街にあるルネッサンス時代に作られた町並み、そして現在開発が進むコンフリュアンス地区まで、リヨンは過去の遺産と現代性を両立させ、時代を経て紡がれるハーモニーを体現しています。

他にない特色を備えた「旧市街」を内包するリヨンの特殊な都市形態が評価され、1998年にはユネスコが、リヨンの歴史的な中心地を世界遺産に認定しました。ユネスコによって登録されたリヨンの歴史地区は全部で427ヘクタールに渡り、これはユネスコによって認められた世界遺産としてはプラハ、ヴェニスとともに最大の面積を占めるものです。

絶えず再生する都市

リヨンはまた偉大な建築家の痕跡が記された都市でもあります。彼らは20年ほど前から象徴的な建物を建設したり、改修することによって、リヨンの建築に明らかな特徴を与えました。

プレスキル地区ではリヨン国立オペラ劇場が1993年に、ジャン・ヌーヴェルによって改修されました。ジャン・ヌーヴェルは、ガラス製のドームを付け加えることによって、この建物の様相を大きく変化させました。テロー広場も1994年にダニエル・ビュランによって改造されました。シテ・アンテルナショナル(国際都市)の設計を託され

たレンゾ・ピアノは、自然環境と共鳴するように再考されたこの区域のまわりに、現代と過去の遺産を融和させ

るプロジェクトを考案しました。コンフリュアンス地区では150ヘクタール以上に渡って全面的に再転換が行われますが、ここではジャン＝ミッシェル・ヴィルモットやリュディ・リショッティ、ジャン＝ポール・ヴィギエ、ジャック・ヘルツォーク、ピエール・ド・ムロンといった著名建築家が建築の刷新に参加します。

リヨンは10年ほど前から、川に囲まれた環境を活用することに務めています。ローヌ川とソーヌ川の川岸の再整備計画は、川の再制御という取り組みの中に位置づけられ、この二つの自然の要素を都市と一体化させることを目指します。ローヌ川の岸辺の改造工事は2006年に終わり、町を南北に貫く5kmの散歩道も造られましたが、ソーヌ川の川岸の工事は始まったばかりで、ここでは自然景観の中に美術作品をインスタレーションすることで新しい空間を演出します。

沸き返る文化的生活

レベルの高い文化施設と文化イベントを備え、リヨンは、クラシックであれコンテンポラリーであれ、国際的な広がりのある文化プログラムを提案しています。リヨンの文化は、すべての人のためのものであり、かつすべての分野を網羅しています。

フルヴィエールの丘にあるガロ＝ロマン劇場



リヨンの代表的なお祭り



光の祭典は1年のうちで最大のイベントで、400万人近いビジターを集めます。この4日間、町とそれを象徴する様々な建造物は、国際的なアーティストが提案する光を使った作品とインスタレーションによって姿を変えます。昔からの伝統に由来するこのフェスティバルには、「光の設計」と都市照明の分野でリヨンがもつ本物のノウハウが結集されます。次回の光の祭典は2016年12月8日から11日に行われます。

もう一つリヨンにとって大切なイベントは、2年ごとに30万人の人々が訪れるダンス・ビエンナーレです。1980年に最初のメゾン・ド・ラ・ダンスができたのがリヨンであったことから、リyonはダンスとは特別な関係を持っています。こういった場はヨーロッパでも珍しく、プログラムには国際的な舞台上で活躍する振付師や、コンテンポラリーアートのクリエイターが名前を連ねます。ダンス・ビエンナーレと隔年で、現代芸術ビエンナーレも開催されます。出品する世界中のアーティストの作品を見るために、20万人のビジターが訪れます。

音楽もリヨンにとっては欠かせない芸術分野の一つです。いくつかの場所が音楽専用に使われていますが、そのなかには、偉大な日本人指揮者である大野和士が音楽監督を務めるリyon国立オペラ劇場と、有名なアメリカ人指揮者レナード・スラトキンが率いるリyon国立管弦楽団の拠点リyon・オーデトリウムがあります。その他の建物もエレクトロミュージックのフェスティバルである「ニューイ・ソノール」などで利用され、夏には欠かせない舞台芸術フェスティバル「フルヴィエールの夜」はガロ＝ロマン劇場跡で開催されます。

1895年にリュミエール兄弟がシネマトグラフを発明したことで、映画が誕生した場所としても知られるリyonは、いろいろな機関を通じてこの素晴らしい遺産を維持しています。これらの機関の中にはリュミエール博物館とリュミエール研究所があります。リュミエール研究所は2009年に、リyon都市共同体全域で開催され映画資産に捧げられた「リュミエール・フェスティバル」を開始しました。次回は2016年10月8日から16日に予定されています。

文化遺産 | ガストロノミー

リyonとガストロノミー(美食)の歴史は、19世紀に遡ります。まずリyonでは、「母親のつくる」名物家庭料理(リyonの母の一人である「ブラジエおばさん」が、世界でもっとも偉大なシェフであるポール・ボキューズを育てました)と、「ブション・リyonネ(リyon地方伝統料理店)」が提供する地元料理が有名です。

こういった伝統料理とイノベーションが混じりあって新しい流れができ、リyon都市圏にある14の星つきレストランが、リyonに美食の首都という名声を与えたこの流れを連綿と引き継いでいます。

リyonは素晴らしい才能を引きつけ続けています。2年ごとに開かれるSIRHA(国際外食産業見本市)には25万人以上もの人々が訪れますが、その期間中にあの有名な「ボキューズ・ドール」国際料理コンクールが行われます。世界各地から参加する若い優秀なシェフたちが3日間にわたって腕を振るい、賞を狙うのです。



リyonは、パリ・ランジス、ディジョン、トゥールとともに、農業省と文化省から、フランスのガストロノミーの重要拠点としてラベル認定されました。近いうちに、現在改修中のオテルデューの中にガストロノミー館が設置される計画があり、リyonの美食文化はさらにクローズアップされることとなります。ガストロノミー館ネットワークの創設は、2010年11月にユネスコが「フランス料理」を人類無形文化遺産に登録したことに端を発するフラッグシップ的な政策の一つで、この創設によってフランスは自国の食文化をプロモーションするツールを備えることとなり、この文化遺産を有効活用することができるのです。

リyonはデリス国際グルメ都市ネットワーク(ナポリ、バルセロナ、広東、モントリオールなど19の「食の町」が集合)にも参加しています。リyonは、こうして美食の町としての使命を果たし続けます。そしてそれは、リyonを愛する人々にとって無上の喜びなのです。

リヨンでは、数多くの日本人シェフが活躍しています。リヨンで活躍する日本人シェフの中には、本場ミシュランガイドに登録されたレストランのシェフも少なくありません。食に対して造詣が深いリヨン市民は、世界の中でも食への探求心があるといっても過言ではないのです。つまり、「真の実力」がなければ通用しないリヨンで活躍している日本人シェフが、どれだけ実力があるかということは、そういったことからわかるでしょう。

・リヨンで活躍する日本人シェフ

Takao Takano : 星付きシェフ

高野シェフは幼少時にお鍋に落ちてしまった、という言い伝えがありますが、そうではなく、高野シェフは新鮮な食材を作る栄養豊富な富士山のふもとで育ちました。春にはタケノコが一日20cmずつ伸び、それを焼いてお醤油をつけて食べる。それだけ。秋には、種類豊富なご飯に秋の風味を与えます。季節がくれるものをそのまま食する。素材をそのまま生かす手を加えすぎない料理が幸せの基礎として思われていました。大勢で大きな食卓を囲む絵はまさに日々の譲り合いのすばらしさを表しています。この自然と人との特別な関係は高野の心の中に残り、良きタイミングで弁護士学校からミクニシェフのフランス料理の本へと高野を移らせたのです。



星付きシェフ : Tsuyoshui Arai

山梨の田舎から東京のレストラン「ラ・ロシェル」渋谷店で9年の修行を経てフランスへ。語学学校に半年通い、その間には、サンタムール村のジャン・ピエールで週末のアルバイトをしたりと、苦学生としてリヨンに滞在し、その後、我々がレストラン「AU 14 FEVRIER」の初代シェフに就任。その後、Masafumiにバトンタッチし、自身は南仏のレストランへ武者修行に旅立つ。その一年後、自身の「力量」を試したい！と切なる要望から、リヨンの旧市街地に客席「14席」のレストランをオープン。



・BOCUSE D'OR

1987年、世界でもっとも有名な料理人ポール・ボキューズによって設立されたフランス料理コンクール。以来26年、世界中のシェフ達に支えられ、料理人が一番獲得したいコンクールとして成長してきました。毎回与えられるテーマ食材（肉・魚）を5時間半で調理し、それぞれ12人分をプレートに、2人分を皿に盛り付けなければならなかったが、2013年大会より魚料理は皿盛りに、肉料理はプレートに12人分、皿に2人分盛り付けることに変更になりました。

2007年では、味・盛付けに加えて、国の独自性を評価する採点基準が加わり、日本代表の長谷川幸太郎シェフは6位に入賞。そして2013年の大会では、浜田統之シェフが魚料理の世界最高得点を獲得するなど日本歴代最高位の3位に入賞しました。前大会にあたる2015年大会では、高山英紀シェフが魚料理特別賞を獲得し、総合5位に入賞をいたしました。日本代表が常に上位入賞を果たす強豪国に成長してきています。

Kotaro HASEGAWA

1973年、東京都出身。16歳から「シエラトン・グランデ・トーキョーベイ」にパティシエとして入り料理人のキャリアをスタートし、「ザ・サミット」や都内有名店で修行を重ね、26歳で渡仏し多くのお店で修行を重ねる。2007年からは「サンス・エ・サヴール」の料理長に就任し店舗の味を守る一方、世界的に有名な料理コンクールに参加するなど、料理人として技術の研鑽に励んでいる。



経済の都、リヨン

リヨンは、欧州の数々の主要都市が羨むような戦略的な要衝に位置しており、歴史的にも商業の都として栄えてきました。また、その数世紀にわたる歴史を通じて、リヨンは、工業技術の先進性により、経済的な繁栄を築いてきました。

リヨンの経済の中核には、技術革新における重要な発見の数々があります。それがリヨンの経済を形成してきました。

リヨン経済の歴史における重要な転機としては、印刷術の発達、ジャカード織布機の発明による絹織物産業の誕生、パスツールやメリューの発見による製薬業の成長、また、初めての小型自動車を開発したマリウス・ベルリエに代表される機械工業や、化学工業の発展などを挙げることができます。

リヨンにはこうして優れた産業が育ち、その基盤は絶えず強化されて今日に至っています。大手企業としては、ルノー・トラックス(輸送用機械、従業員数7000人強)、セブ(家電、従業員数1万3000人)、ピオメリュー(医療、従業員数5800人、うち欧州は3590人)、GL イベント(従業員数3000人、世界で30ヵ所の見本市会場を運営)などを挙げることができます。

リヨンを進出先として選ぶ企業の数も多く、企業数は現在、13万5000社(うち決定機能を置くのは1万5000社)を数えます。また、起業も盛んで、年間1万5000社を超える起業数は、率で見るとフランスで最高となっています。

パール・デュエのビジネス地区は、パリのラデファンス地区に次ぐフランス随一の規模を誇り、サービス部門の企業や国際企業の本社機能が集中しています。

歴史的な先進分野

歴史的な産業分野から将来性のある分野を創出する能力。それがリヨンの強みです。リヨンには、企業や研究者、研究機関の協力により運営される5つのクラスター(競争拠点)があります。これらのクラスターはそれぞれ、リヨンが歴史的に強い部門を対象としています。

・生命科学・感染症研究

パスツールの研究とピオメリュー社の発展を礎として、リヨンは特に、感染症研究の分野で世界的なリーダーとなりました。クラスターの「リヨン・ビオポール」は、診断学及びワクチンの分野のグローバルCOEとして位置づけられ、ヒトと動物の感染症への対応手段の開発とがん研究の分野で協働型プロジェクトを推進する役割を担っています。サノフィ・パスツール(ヒト用ワクチンで世界最大手)、メリアル(獣医学製品で世界最大手)、ピオメリュー(細菌感染症の診断薬で世界最大手)などが、創設時からクラスターに参加しています。

こうした協力体制とリヨンの先進性は、技術研究センター「ビオアステール(BioAster)」により、一段と強化されました。このセンターは、リヨン・ビオポールとパスツール研究所が共同で設立、投資額は9000万ユーロに上ります。感染症研究と微生物学を専門とする新たな研究プラットフォームとして、抗感染症薬、ヒト用及び動物用のワクチン、診断薬、プロバイオティクスの分野で、40件の研究開発プロジェクトを推進し、将来的には4万平方メートルの拠点に120人以上の研究員を受け入れています。新センターは、世界保健機関(WHO)の感染症専門のサーベイランス・対応センター(CSR)、CIRC(国際がん研究センター)、ジャン・メリューP4研究所などの既存施設と並んで、リヨンのグローバルな研究拠点となります。

・クリーンテクノロジー

化学産業で知られるリヨンは、環境保護の課題に取り組んできました。この結果、地元で優れた研究開発能力が育ち、リヨンは、技術革新を重ねて、化学・環境分野で先進的な都市のひとつとなりました。現在、リヨン都市圏にとって環境技術は第2の産業部門であり、企業数は750社、雇用数は1万3000人強に上っています。2005年には、アルケマ、CNRS(フランス国立科学研究センター)、GDF スエズ、スエズ・エンバイロメント、IFP 新エネルギー、ソルベイが、この分野の世界的クラスター「アクセラ(Axelera)」を設置。この組織は同産業部門の一層の成長に貢献しています。同クラスターは、研究開発プロジェクト(これまでに180件を認定、総額規模は5億7000万ユーロ)の推進を通じて、化学・環境分野の企業、研究所、教育機関の間の連携を後押ししています。

・リヨン都市圏の誘致力強化に貢献する3つの部門

未来の輸送手段をテーマとするクラスター「リヨン・アーバントラック&バス」により、リyonは、輸送用機械と都市交通システムの分野で欧州第2位の地位を誇ります。

クリエイション産業は、動画分野(ビデオゲーム、映画、映像、アニメ、マルチメディア)のクラスター「イマジノブ(Imaginove)」を核に発展。未来を先取りした取り組みと、業界の技術革新の支援とを軸に、様々な関係分野の間でシナジー効果を実現するための取り組みを進めています。

絹織物分野でリyonが過去に培ったノウハウは、技術繊維分野の発展をもたらしました。この分野ではクラスター「テクテラ(Techtera)」が設置され、ブロシエ・アンデュストリなどの企業が活躍しています。

成長が期待される部門ーロボット工学とスマートシティ

少し前から、リyonで実現した数多くの技術革新を土台として、将来性のある2つの部門が、従来の主要部門の延長上に発展を遂げつつあります。

・ロボット工学

ロボット工学は、産業、輸送、医療、ソフトウェアといったリyonが以前から強い部門を中心とする数多くの部門が関係し、分野横断的な発展を遂げています。

リyonには、この分野に関係するエンジニア学院や研究開発機関が数多く集まっており、ロボット工学が発展するのは自然の流れでした。2011年には、ロボットをテーマとする第1回欧州フォーラム「イノロボ(Innorobo)」がリyonで開催されました。このイベントは、SYROBO(ロボット工学業界団体)のブリュノ・ボネル会長(ロボポリス社のCEO)が主催、その後は毎年開催されており、世界から100社程度が出席、リyonの企業と、アジアを中心とする世界の企業との間で強い取引関係を実現することに貢献しています。2012年に韓国ソウルで開かれたロボット・ワールドにリyonは招待ゲストとして参加し、この分野で両国の間に持続的な協力関係が築かれました。

スマートシティとスマートグリッド

未来の都市が直面する課題への対応を目指して、リyonは、その技術革新力を活かし、スマートグリッド戦略を核にした「スマートシティ」プロジェクトに着手しました。これは、経済成長と持続可能な開発を両立させることを目的に、都市や社会、環境が抱える問題への新たな技術的ソリューションを実験し、また創出することを目指す取り組みであり、都市における生活の質の向上と、雇用創出が目標となります。

リyon都市共同体とNEDO(新エネルギー・産業技術総合開発機構)は、斬新な共同プロジェクトである「リyon・スマートコミュニティ」を開始しました。実証プロジェクトの実施場所にはリyon・コンフレアンス地区が選ばれました。1万2000平方メートル強の3つのポジティブ・エナジー・ビルの建設を含む一連のプロジェクトが実施されます。このビルは、隈研吾による設計で、不動産開発業者のブイグ・イモビリエがSLCピタンスの協力を得て建設、NEDOが技術支援を与えています。

スマートグリッド技術を用いて、これらの3つのビルではエネルギー管理の最適化が図られます。また、住民の移動を最適するために電気自動車が登場され、充電には、現場に設置される太陽光発電設備から得られる電力が用いられます。

都市開発の大規模プロジェクト

欧州に開かれた街であるリヨン都市圏は、世界へのアクセスを重視した大規模な都市開発プロジェクトを通じて、誘致力の強化に努めています。

リヨン・コンフリユアンス：

リヨン・コンフリユアンス地区は、都市中心部の開発プロジェクトとしては、欧州でも最大級の部類に入ります。ローヌ川とソーヌ側の合流地点に位置し、リヨンの中心地に隣接した形で広がる150ヘクタールの土地の再整備計画であり、工場や倉庫、港湾施設などがあった地区が対象となります。これにより、リヨンの中心街の面積は2倍に拡大することになります。

このプロジェクトの第1フェーズは既に模範的な形で終了、現在は第2フェーズに入っています。これまでの整備事業で、地区は既に変貌を遂げ、地区が果たす役割も様変わりし、進出や居住を望む企業や住民が増えています。既に2000人が地区内に居住しており、ウォータースポーツ場や数多くの店舗、レジャー施設、カフェなどを訪れる人々も多数に上っています。

第2フェーズの事業は、スイスの建築事務所ヘルツォーク&ド・ムロンが設計を手掛けており、創造的な建築群が整備されることとなります。それに加えて、環境に優しい移動手段が活用され、創造性と環境パフォーマンス、技術革新の点で優れた新たなモデル地区が誕生することとなります。スマートグリッドの分野をはじめとする数多くの実証プロジェクトが推進されます。

この地区は、新たな整備事業や混在型の建物の建設、コンフリユアンス美術館のオープン(コープ・ヒンメルブラウの設計)により、さらに変貌を遂げています。コンフリユアンス美術館は、ローヌ川とソーヌ側に挟まれた半島状のこの地区の先端に位置しており、斬新なコンセプトに基づいた展示を行っています。その洗練されたデザインの建物は街の新たなシンボルとなっています。

リヨン・パール・デュー：

リヨン・パール・デュー地区は、サービス部門と企業の決定機能の集中度ではフランスで第2位のビジネス地区であり、地区の中心にあるパール・デュー駅は、フランスと欧州における主要な鉄道駅の一つです。現在、駅周辺地区では、建築事務所AUCの設計による都市計画プロジェクトの枠内で、再開発が進められています。生活環境を改善しつつ、また利用者の便益を高めつつ、地区内の建物を増やすのが再開発の目的で、具体的には、地区内に60万平方メートルに上るオフィスを増築し、総面積を160万平方メートルまで拡大し、3万5000人の雇用を新たに誘致するという目標が設定されています。また、店舗やレジャー施設、ホテルも、合計で20万平方メートルが追加で整備されます。

「トゥー・リヨン(Two Lyon)」プロジェクト、9万5000平方メートルの混在型ビルを整備

リヨン・パール・デュー地区の中心では、ホテルとオフィスの建物群を整備するという過去最大級の整備プロジェクトが進められています。

この野心的なプロジェクトでは、リヨン・パール・デューのTGV(高速鉄道)駅に隣接する形で、9万5000平方メートルに上るオフィス、ホテル、店舗などが整備されます。オフィス総面積は5万5000平方メートルに及ぶ予定で、4つ星・250室の「クラウン・プラザ」ホテル1軒と、200室の「ノボテル」ホテル1軒などが建設されます。

グラン・オテルデュー(公立病院)、歴史的建造物の改修のシンボルに：

「グラン・オテルデュー」はスフロが設計し、18世紀に建てられた傑作建造物であり、2010年まで病院として用いられました。リヨンを代表する歴史的建造物で、市民にも親しまれている「グラン・オテルデュー」は、改修工事を経て、レストランや店舗、5つ星ホテルなどが入居する施設として、2017年初旬に再オープンする予定です。建物内にはガストロノミー館も入居、このために増築がなされます。リヨンは、フランスのガストロノミーの重要拠点として、パリ・ランジス、ディジョン、トゥールなどと共ニラベル認定を受けました。

リヨンの魅力

過去20年間でリオンは劇的に変化しました。その長所と歴史・伝統に一層の磨きをかけつつ、リオンは大きく変貌し、より美しく、開放的になりました。このダイナミックな変革により、リヨンの魅力はあらゆる分野で飛躍的に高まりました。

・企業にとっての魅力：

国際的な景気低迷の中であって、リオンは例外的に活況を呈しています。リオン地方経済開発公社(ADERLY)では2015年、93件の投資受け入れという記録的成果をあげました。これらの投資により、直接雇用1839口が創出されました。

・研究者や学生にとっての魅力：

世界的な研究センターや専門分野の有名校が多数所在するリオンは、学術面でも有数の都市です。2万人の外国人学生が、多数あるリオンの大学のいずれかでフランス語を学び、INSA リオン(エンジニア学校)、ENS(高等師範学校)、EM リオン(ビジネススクール)といった著名な学校で専門の勉強に励んでいます。EM リオンは、フィナンシャル・タイムズ紙による世界ビジネススクール・ランキングで、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスを凌いで9位につけています。

・観光客にとっての魅力：

国際会議協会(ICCA)の出張者数ランキングでは、リオンはパリにつぐ国内2位の座を不動のものとしています。また世界最大の旅行サイト「トリップアドバイザー」(月間ユニークビジター数2億人)が実施した「旅行者による目的地ランキング」によると、リオンはレジャー目的の旅行先としてもフランス国内4位にランクインしています。この世界の人気観光地ランキングは毎年行われており、リオンは前回から5つランクをあげて国内トップ5入りし、パリ、ニース、カンヌという国際的観光地の後に続きました。

ランキングからみるリオン

「欧州で投資者にとってもっとも魅力的な市」で**欧州6位** / E&Y 2015

多数の外国企業受け入れの実績を背景に、リオンはこのランキングで欧州6位につけました。これは、欧州の意思決定者がリオンに強い関心を持っていることを示す結果です。

「特別な食文化が根付く街」で**世界5位** / ナショナルジオグラフィック 2015

リオンは料理にもっともうるさい国フランスでその文化の中心地です。ポテト・リヨネーズが有名です。日本では大阪がたこやきで7位に順位付けされています。

「旅行者が選ぶフランスで訪れるべき場所」で**3位** / Trip advisor 2016

1位がパリ、2位がニース、3位がリオンです。

「暮らしやすい都市」で**世界38位** / マーサーの「暮らしやすい都市」ランキング 2016

生活のクオリティや物価など様々な基準にもとづき世界230都市を分析するこのランキングの2016年度において、リオンは、ロンドンやパリなどの大都市を凌いで38位につけました。

リヨンのブランディングを担う「ONLY LYON」

こうしたリヨンの躍進には、都市としての知名度向上が寄与しています。リヨンの知名度を支えているのが都市のブランディングを目指す「ONLYLYON」という革新的な取り組みです。

地域経済ガバナンスから生まれた「ONLYLYON」の取り組みは、リヨンのイメージと知名度の向上を目指して2007年にスタートしました。ニューヨークやアムステルダムといった大都市による同様の取り組みにヒントを得ていますが、フランスでは初の試みです。国際的に活躍する19のパートナー機関・企業が参加しており、これだけ広範なガバナンス規模を誇る取り組みは世界でも他に例がありません。活動の中心は、世界各地の要所や国際的メディアを通じた広報キャンペーンです。キャンペーンは2013年にリニューアルされ、新たに「リヨンに夢中 (Addicted to Lyon)」と銘打たれました。人物に焦点をあて、リヨンを選択した国際的人材のプロフィールを演出するキャンペーンを展開しています。ONLYLYONでは同時に、PR戦略、イベント戦略、ソーシャルネットワークを展開し、世界で現在1万2000人を数えるONLYLYON大使ネットワークの運営にもあたっています。2012年以来、民間のパートナーが参加する「ClubPrestige」が、ONLYLYONプログラムを資金面でも支援しています。

ONLYLYONには、13の創立メンバー(リヨン商工会議所、リヨン都市共同体、リヨンの市、リヨン地方経済開発公社Aderly、リヨン観光局、ローヌ県議会、リヨン大学、リヨン空港、「シテ・アンテルナショナル」コンベンションセンター、ユーレクスポ、仏経営者団体MEDEF リヨン=ローヌ支部、中小企業総連合CGPME ローヌ支部、ローヌ手工業会議所)と民間パートナー6社(EDF、サノフィ、ERDF、ルノー・トラックス、GDF、Sonepar/Mat Electrique)が参加しています。

リヨンと日本の関係

リヨンと日本との経済的・文化的関係は、19世紀半ばに遡ります。絹織物産業の世界的な中心地として知られていたリヨンは、欧州全土に広がった蚕の病気により打撃を受けました。そこでリヨンは、日本に原材料の新しい供給元を求めました。

1860年頃、リヨンの絹織物卸売業者は横浜に輸出入子会社を設立しました。日本の絹織物の最大出荷港であった横浜は、たちまちリヨンの主要な提携先になりました。この関係が誕生したことにより、リヨンの絹織物製造業は衰退を免れ、同時に日仏間の最初の直接貿易が始まったのです。こうした特別な関係を背景に、両都市は1959年に姉妹都市提携を成立させました。

リヨンと日本との関係は近年新たな発展を遂げました。リヨンへ複数の日本企業が進出し、領事事務所が開設されました。

この関係はまた、リヨンの大学と日本の大学間の数多くの提携を通じてより強いものとなっています。教育は両国間の協力にとって非常に重要なベクトルであり、日本の教育機関のいくつかはリヨンに分校を設置しています。例えば辻調理専門学校リヨン校には年間100人から150人の日本人学生が留学し、卒業後にはリヨン地方の有名レストランや高級総菜店で研修を行っています。東北大学の流体科学研究所(同分野では世界2位)も2005年1月に、CNRS(フランス国立科学研究センター)の金属物理学・材料学研究グループとの学術連携の枠内で、リヨンのINSA(国立応用科学院リヨン校)内にリエゾンオフィスを開設しました。

リヨン都市圏への日本人観光客の宿泊日数は2012年に2万8000泊を数えました。この数字はアジアからの観光客としてはトップです。フランス好きの日本人観光客がリヨンに惹かれる主な理由は、美食の街としてのリヨンの評判と、ユネスコ世界遺産にも登録された2000年の歴史です。個人旅行で、あるいはグループ旅行で、適度な大きさの都市でフランスのライフスタイルを楽しむためリヨンを訪れる日本人が増えています。リヨン都市圏への日本人観光客は5月から10月に多く、観光局を訪れる人も年々増加しています(2012年には前年比で5%増、外国人旅行者の中で10位)。

経済面を見ると、リヨン地方には日本企業60社が進出しています。そのなかには、リヨンの地域経済にとって特に大きな重要性をもつ企業がいくつかあります。JTEKTヨーロッパ(元光洋ステアリング・ヨーロッパ)は1700人の従業員を擁し、自動車向けステアリングシステムの欧州トップ企業です。トーレ・プラスチック(従業員500人)はプラスチックフィルムを製造、ピエール・ベニット市のダイキン・ケミカル(従業員10人)はディーゼル車向けのフッ素系エラストマーを製造しています。

コンフリユアンス地区でのリヨン都市共同体とNEDOの提携：

イノベーションを支援する新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)は、欧州での「スマート・コミュニティ」実証事業実施に最適な地区として、リヨン都市共同体のコンフリユアンス地区を選定しました。パートナーであるリヨン都市共同体とNEDOは、この共同プロジェクトを通じて、リヨン・コンフリユアンス地区をエネルギー効率に関するモデル地区とすることを目標にしています。NEDOのプロジェクト入札の結果、東芝と東芝ソリューションが、この計画の実現を担う日本側コンソーシアムのまとめ役として選定されました。

NEDOの技術支援のもと、建築家の隈研吾とブイグ・イモビリエ(不動産デベロッパー)/SLCピタンスの連携も実現しました。公的機関、大企業、革新的なスタートアップの間の戦略的提携が、リヨン・スマートコミュニティ実証事業の成功の根幹にあります。

この先進的な提携事業は、リヨンと日本間の多数の分野における新たな協力に道を開くものです。